

4.2 疑い深く調べる

良いレポートを書くには、できるだけ多くの書物やウェブサイトを疑い深く読むことが重要である。常に「なぜ?」「どうして?」と問いながらいろいろな情報を探る。読んでいてわからない用語がでてきたらその語をまた調べたりして、自分で内容をよく理解できるまで突き詰めて調べる。この過程が肝腎である。調べているうちに新しい「問い」も浮かんでくる。書くべき内容はどんどん広がっていく。

4.2.1 図書館の書物の利用

図書館にある蔵書を検索するためのツールが オーバック OPAC (online public access catalog) である(図書館トップページの「資料・情報検索」タブから)。離れたキャンパスにある蔵書の場合は取り寄せてもらえる。連携している近隣大学(関西大学)の図書館や大阪市立図書館・府立図書館の蔵書も含めて検索できる横断検索も用意されている。

目的の書物が学内に所蔵されていない場合は、「学外相互利用サービス」が利用できる。有料ではあるが、アイエルエル ILL (inter-library loan) とよばれる「学外文献複写」と「学外図書借受」のサービスが受けられる。他大学図書館や公共図書館を直接訪ねて利用する場合に、必要であれば紹介状を本学図書館で発行してもらえる。

図書館で得られる資料には一次資料と二次資料がある。一次資料というのは原典ともよばれ、新たな発見・発想や著者自身の主張が書かれたオリジナルの書籍・雑誌記事・学術論文などをいう。一方、二次資料はどの一次資料にどのような情報が載っているかを整理したり、多くの一次資料の内容をまとめて解説したりしたもののことで、「総説」(英語では“review”)とよばれる解説・評論や、各種学術データベース、専門事典・年鑑・辞書・百科事典など(参考図書ともいう)が含まれる。論文やレポートに利用する情報や引用する文章は、できるだけ一次資料に基づくのが望ましいとされている。二次資料は一次資料に辿り着くための手がかりとして利用すべきだろう。

インターネット検索は情報に辿り着く手間がかからないせいで、安直にわかった気になってしまうことが欠点であるが、書物の場合はページを繰って情報を探す過程で、その主題の周囲が必然的に目に入り、それが大いに理解を助けることになる。また校正・校閲を経て印刷し書籍流通にのせるにはかなりの出版費用がかかるために、書物になっていたらその内容はある程度の信用がおけると判断できる。レポートの提出期限が迫って余裕がなくなる前に図書館・図書室へ行って、まず書物の情報を利用しよ

う。図書館のカウンターでは情報を得るための相談にのってもらえる(レファレンス・サービスという)ので利用するとよい。

4.2.2 インターネット情報の利用

多くの学生が情報を探すのにGoogle®検索を利用しているようだ。知らないことはどんどん調べるべきで、ググって最新の情報が得られることもある。だがその情報を利用する前に、そのウェブサイトは信用できるのだろうか^{だま}と疑う必要がある。印刷出版とは異なり、費用をかけずに自分の主張を世間に公表できるので、安易で信用度が低いものが多い。間違った理解のいい加減な記述がたくさんある。いかにも正しく確実であるかのような説明調・断言調の文章に騙されてはいけない。インターネットの情報は玉石混淆であることを肝に銘じて利用しよう。

レポートに使えるような情報を見つけたら、それが信頼できるのかどうか、どう判断したらよいのだろうか。まずそのウェブサイトの著者・編集者が誰で、誰を対象に書かれたものであるのかを確認すべきだ。趣味で蘊蓄を並べただけなのか、専門家が言葉を選んで責任を持って書いたものか^{うんちく}の見極めは重要である。中には判断のつかないものもあるが、その場合は必ず別のウェブサイトの記述がどうなっているのかを確認しよう。複数のサイトで同じ内容が書かれていれば信用度は上がる。でも他人のウェブサイトの内容をコピペしている場合も多く、複数あっても信用できるとは言い切れないので注意する必要がある。

インターネット上の百科事典(=二次資料)として利用されているものにWikipediaがある。上手に説明されていて、いかにも正しいと思ってしまいそうになるものもあるが、これらも疑い深く読まなければいけない(Wikipediaは専門家でなくても執筆でき、また次々と書き直すことができる)。優れたページの情報には引用URL(=一次資料)がリンクされているので、そのリンクにも目を通すべきだ。リンク先が英語のページであっても尻込みせずにチャレンジして読んでほしい。たとえ読むのに時間がかかったとしても、そこからあなたの学問の世界の扉が開くかもしれない。なお卒業論文のレベルになれば原論文を読みこなさなければならないのは当然のことである。

学内ネットワークに繋がっている情報端末からは、CiNii^{サイニイ}(日本の学術論文データベース)やJapanKnowledge(日本の総合知識データベース)、聞蔵や日経BP(新聞記事データベース)など、本学図書館が契約している各種データベースにアクセスできる(図書館トップページの「資料・情報検索」タブから)。これらは印刷物の場合と同様に多くの人の校閲を経てデータベース化されたもので、より信頼性が高いインターネット上の二次資料といえる。

図書館ではこれらデータベースを利用する情報検索法の講習会も適宜行われているので、興味のある人は参加してみるとよい。膨大な数の情報からどうやって目的の情報を絞り込むかのノウハウなどを掴むことができる。個人やグループでの申し込みで講習会を開いてもらえる。詳細は各キャンパスの図書館のサイトから確認しよう。

4.2.3 矛盾する情報を見つけた場合

調べ物をしていると、ある問いに対して正反対の答えや相矛盾した情報が見つかることが時々ある。そういう場合は良いレポートが書ける端緒を見つけたとってよい。両方の根拠を自分なりに説明して(もちろん正しく引用の上)、自分はどちらがより正しいと考えるかについての意見とその理由を述べることにより、内容の濃いレポートが仕上がる。運がよければ、両方の考えの長所を取り込んだ、自分なりの新しい見解を思いつくかもしれない。オリジナリティの高いレポートが書けるチャンスである。つまり、書物やインターネットの情報を自分の思考の切っ掛けとする。これが良いレポートを書く極意のひとつである。

4.2.4 情報源の記録

得られた情報を引用するためには、情報の出所(3.4節にある4つの文献情報①～④)を記録しておく必要がある(ウェブサイトの場合はURLと共に検索した年-月-日も記録しておく)。